主催　関西大学教育推進部・協力　伊丹市教育委員会

平成 28 年度「考動力」作文コンテスト・高校生の部

発行日　平成29年3月31日（金）
発行元　関西大学教育推進部
ライティングラボ
西浦真喜子・小林　至道
毛利　美穂・吉﨑　裕子

関西大学教育推進部は、伊丹市教育委員会のご協力のもと、大学間連携共同教育推進事業「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」（以下、本取組と表記）の高大連携事業および広報活動の一環として、平成 25 年度より毎年、「考動力」作文コンテストを開催してまいりました。本取組の最終年度である今年度は、高校生の部 1,172 作品（小論文部門 531、ショートショート部門 641）、大学生の部 133 作品（小論文部門 127、ショートショート部門 6）と、過去最多の応募数となりました。応募者ならびに関係各位に厚く御礼申し上げます。

応募作品の選考は、ライティングラボ特命教員（西浦真喜子先生、小林至道先生、毛利美穂先生）を中心に、本取組企画運営部会の教職員（中澤務先生、岩﨑千晶先生、木元隆文氏、竹中喜一氏、宮田将氏）とライティングラボ TA、さらに、教育開発支援センター(CTL)長の田中俊也先生、神戸市立工業高等専門学校講師であり CTL 研究員でもあります林田定男先生、教育推進部特命教員であり同じく CTL 研究員でもあります千葉美保子先生、CTL 研究員の佐々木知彦先生、の計 36 名で行いました。ご応募いただいた作品は、テーマ設定においても文章表現においても実に多様であり、多くの審査員が悩みながら選考を重ねました。その結果、小論文部門で最優秀賞 1 作品、優秀賞 1 作品、ショートショート部門で優秀賞 1 作品、特別賞 2 作品をそれぞれ選出するに至りました。

小論文部門・最優秀賞
「和楽器は西洋楽器に勝てないのか」
田中真悠子さん（お茶の水女子大学附属高等学校2年）

優秀賞
「漫才授業」　岩本小春さん（関西大学北陽高等学校2年）

【小論文部門講評】

小論文部門では、本コンテストが求める小論文を「自ら問いを設定し、問いに対する自分の答えを述べ、なぜそう言えるのかという理由について、客観的な根拠をもとに筋道を立てて説明し、読み手を説得させる文章」と定義しました。テーマは、「○○を良くするためには」であり、○○を各自が設定し、タイトルを自由につけることとしました。さらに、「他者の意見や調査データを必ず文章内に引用すること」を要件に加え、近年問題とされているインターネット上の文章における剽窃や情報源の偏りの問題を考慮し、「ウェブの情報のみではなく、本、論文、新聞記事などを含めて 2 種類以上の情報を用いること」という条件を設けました。

第 1 次選考では、引用された文献が 2 種類以上あるかを基準とし、ラボ特命教員が評価しました。第 2 次選考では、「引用の方法」「小論文の構成」「問いと主張の対応」「段落の構成と表記」の 4 項目について、可か不可の 2 段階でラボ TA が評価しました。続く第 3 次選考では、ラボ特命教員、CTL 研究員、本取組企画運営部会の事務職員が、「資料の取り扱い」「自分の意見」「全体の構成」の 3 つの観点を中心に、ルーブリックを用いて 5 段階で評価しました。最終選考ではこれらの観点に「オリジナリティ」を加えて、ラボ特命教員、中澤先生、岩﨑先生、田中先生、林田先生の 7 名で選考しました。

「資料の取り扱い」では、引用している文献の種類、引用箇所の記述の仕方が要件を満たしているか、さらに引用すべき箇所で適切な文献を引用できているか、という点を評価のポイントとしました。「自分の意見」では、文章を通して自分の言いたいことを明確に述べているかに着目して評価しました。「全体の構成」では、はじめに自分が設定した問いについて述べ、その問いの答えとなる意見を、文献を引用しながら論証し、おわりに自分が設定した問いの答えを示す、という文章の流れが整っているかを評価しました。最終選考では、「オリジナリティ」として、テーマ設定がありきたりなものではなく、独創性があるかを評価の観点に加えました。

今年度の応募作品は、「○○を良くしよう」という一生懸命な気持ちが伝わるものが多くありました。バラエティに富んだ提案に、高校生の発想力の輝かしさを感じました。

その一方で、「本当にその方法で良くなるのか」と疑問に思うものもありました。その原因となったのが文献や調査データの引用です。応募された小論文には、2 種類の文献を引用するにとどまり、必要であるにもかかわらず他の文献を引用していないものが、少なからずありました。もちろん、2 つの文献を引用すれば事足りる場合もありますが、作品を読みながら「ここに文献や調査データの引用が欲しい」と思うことが多かったのも事実です。文献を引用してほしいところで引用がないまま説明したり、意見を述べている小論文は、読み手を説得するところまで到達できません。しかし、適切な文献や調査データを客観的根拠に用いて意見を述べている小論文は、「その方法だと改善が期待され、取り組む価値がある」と読み手を納得させることができます。論理的な文章を書く際には、どこにどのような文献を用いると、自分の意見に説得力が増すのかを意識しながら書いてほしいと思います。

入賞した 2 作品は、上記の点を満たしていたうえに、オリジナリティのあ

る内容が高く評価されました。入賞作品の講評は次の通りです。

最優秀賞の田中さんの作品「和楽器は西洋楽器に勝てないのか」は、楽器を取り上げたテーマ設定の独創性と必要な箇所できちんと文献を引用できている点が群を抜いていました。和楽器を取り巻く状況を文献やデータに基づいて丁寧に考察し、和楽器の認知度や普及率の向上に対して自分の意見を述べる流れはたいへん素晴らしいものでした。ただひとつ、高度な要求にはなりますが、比較的安価な素材で和楽器を製作するという提案についてはもう少し考察を深めたいところです。なぜ高価な素材でなければ和楽器が作られない、あるいは受け入れられないのか、議論の余地があるのではないでしょうか。

優秀賞の岩本さんの作品「漫才授業」も、大阪ならではのテーマ設定にオリジナリティがあり、「おもしろい」と評価されました。漫才の「ボケ」と「ツッコミ」の機能の分析に基づき、高校の授業に応用させるという意見には、確かに授業が良くなる可能性が感じられました。一方、文章全体が 2 段落で構成されていた点は、やや読みづらい印象を与えてしまいました。文章のはじめに述べるべき内容（問いや問いの背景など）を「序論」としてまとめる、意見を述べる際にトピックごとに段落に分ける、など適切に段落を作成し、より読みやすい文章へブラッシュアップされることを期待します。

それでは、作品と入賞者の喜びの声、および伊丹市教育委員会からいただきました入賞作品への講評をご覧ください。

【小論文部門最優秀賞】
和楽器は西洋楽器に勝てないのか

お茶の水女子大学附属高校 2 年
田中真悠子

私は現在、高校の授業の一環で音楽のグローバル化について学んでいる。その中で、「和楽器は後世に残していくべきなのか」という議題で討論をしたことがあったが、私はこれを受けて、そもそも何故「和楽器を残すかどうか」が議題になり得るのか疑問に思った。西洋発祥の楽器はそんなことを討論しなくても多くの楽団に必要とされ残っていくだろう。小澤征爾氏（1984）と武満徹氏（1984）はそれぞれ「西洋音楽はわかりやすいから」、「平均律で、普及しやすいように作られているから」と考えているようだが（小澤征爾, 武満徹　1984, p.113）、西洋楽器の勢力が強いだけでなく、和楽器やこれらを取り巻く環境、風潮にも原因があるのではないかと考え、今回の調査をすることにした。

日本の楽器の世界は、伝統を残し質を重視する風潮が強い。柴田南雄氏（2010）が「日本ではひじょうに保守的で、近代的な素材は廉価な代用品としか見られないのが現状であると思う」と述べる通り（柴田南雄　2010, p.88）、日本は楽器の素材に非常にこだわる。その結果、材料の近代化が進む西洋楽器と比べて、演奏会など公の場で用いられる和楽器の値段は昔のものから下がらない。むしろ、同氏が箏について「箏の絹糸の原糸を供給する農家（ほとんど滋賀県という）は五、六軒に激減している」と述べていることから（柴田南雄　2010,　p.77）、値段が上がっている可能性すらある。もちろん、これは材質にこだわる限り箏に限った話ではない。ヴァイオリンの金属弦のように安価な素材が増え、昔より手が出やすくなった西洋楽器と比較して、和楽器を習い始めることに対するハードルが高いのは想像に難くない。

この差が顕著に出ているデータがある。株式会社バレクセル（2016）によると、首都圏の高校で琴部がある学校が 9 校、箏曲部が 116 校、和太鼓部が 59 校しかないのに対し、吹奏楽部がある高校は 814 校にもなるという（株式会社バレクセル　2016）。管弦楽部や合奏弦楽部が和楽器と西洋楽器の区別をすることなく括られていたり、上記に挙げた以外の名称の和楽器を扱う部活が小規模ながら点在している可能性があったりすることを考慮すると一概に比較をするのは難しいが、この数値だけでも日本国内において西洋楽器の方が人気が高いことがわかるだろう。

以上のことから、「和楽器は残すべきか」といった問題が出てくるのは、小澤・武満両氏が述べる西洋音楽の強さだけではなく、質を強く求めるが故に価格のハードルが高くなったことなどを受けて和楽器に携わる人の数が目に見える形で減っていることが原因であるといえる。

この状況を打開するためには、和楽器に携わる人々が安価な素材をある程度許容することが大きな条件になってくると考える。ナイロンやテトロンの弦の箏など大衆が買い求めやすい価格の楽器の出番が増えれば、それらの楽器そのものの認知度も向上し、良質な楽器の需要も相対的に高まると考えられるからだ。和楽器の普及率

田中さんの喜びの声

この度は最優秀賞に選考していただきありがとうございます。私は学校の「持続可能な社会の探究Ⅰ」という授業で「音楽のグローバル化」班として探究活動をしており、その過程で今回の論文の執筆に至ったのですが、ここまで評価されるとは思っていなかったので非常に驚いています。

私はこの論文の執筆の後「邦楽と洋楽の融合の可能性」というテーマで論文を書いたのですが、やはり邦楽界は伝統を強く重んじ、材料や製法だけでなく演奏の方法や形態が変わることも快く思わない傾向にあるようです。私は、日本古来の文化をよりかつての姿に近い形で後世に残していくことに否定的になろうとは思いませんが、文化の「人が伝えようとしないと伝わらない」という性質上、創作や演奏の間口を広げないと伝える人がいなくなってしまうのではと考えています。論文を読んでくださった方が少しでも邦楽の課題について考えてくだされればと思います。

を良くするためには、和楽器に携わる人を増やし、和楽器の市場を拡大することが必要である。
参考文献
株式会社バレクセル「スタディ高校受験首都圏版」https://www.studyh.jp 2016/9/13 最終閲覧
小澤征爾・武満徹（1984）「音楽」新潮文庫, p.113.
柴田南雄（2010）「日本の音楽を聴く」岩波現代文庫, p.88, 77.

伊丹市教育委員会からの講評

タイトルが「和楽器は西洋楽器に勝てないのか」であり、楽器の優劣についての小論文だと思い込んで読み始めたが、「和楽器を残すかどうか」という伝統文化の存続に関する内容で、興味深く読ませて頂いた。

和楽器と西洋楽器の状況について書かれていたが、楽器だけではなく、伝統文化全体について改めて考えさせられる内容であった。

最後の段落では状況を打開するために、和楽器の素材を安価なものにすることをある程度許容することについて触れられていたが、和楽器が楽器の素材にこだわっている理由、安価な素材を許容していない理由等についての考察があると、もっと深く楽しめるものになったのではないだろうか。

今後も、本作のように、現実的な問題を取り扱う作品が創作されることを望む。

【小論文部門優秀賞】

漫才授業

関西大学北陽高校 2 年　岩本小春

岩本さんの喜びの声

担任の先生から受賞を初めて聞いたときは実感が湧かず、本当に私が･･･と信じられない思いでいっぱいでした。しかし、何名かの先生たちからお話しを頂戴するにつれ実感が湧くと共に、心の内からじわじわと喜びが浮いてきました。この小論文を書くきっかけになったのは、私の学年の国語科担当でいらっしゃる伊藤先生の「面白い」という言葉でした。当時私は、小論文を書くにあたり 2 つのテーマを考えていました。2 つのテーマのうち、どちらを書くべきか悩んでいるときに、「高校の授業に漫才を取り入れてはどうか」という漫才授業の元となる案を伊藤先生に押して貰いこの小論文を書くことになったのです。今回の経験で自分に協力してくれる存在のありがたさを実感しました。伊藤先生を始め、小論文の根拠となってくださった青山さんや畑野さん、その他大勢の方々にお礼を言いたいです。ほんとうにどうもありがとうございました。

大阪人と言えば「ノリが良い」・「面白い」・「ケチくさい」・「がさつ」などのイメージがある。しかし、青山（2007）によると大阪府の南北に所得・教育面で格差が認められており、北大阪と南大阪では性格も異なると考えられる。それなのに、難波以南からきているイメージが大阪府全体のイメージとして定着してしまった。実情と違う認識を持たれることにより、苦労する人がいる。だが、全国的な認識の誤差はチャンスでないか。「ケチくさい」・「がさつ」などのマイナスイメージはともかく、「面白い」・「ノリが良い」等は社会において大きな武器となることは、厚生労働省（2013）労働経済の分析第 3 章、第一節企業が求める人材において、組織協調性が 52%、コミュニケーション能力が 51%を占めていたことからも明白である。ならば全国から認識されている優良なイメージの方へ北大阪人から近づけばよいのではないか。その一つの方法として、私は北大阪の高等学校の授業に漫才を取り入れることを推奨する。漫才とは二人で言葉の応酬をする形式のお笑いだ。お笑いはその名の通り人を笑わせることを指す。コミュニケーションをする際、最も重要なのは会話であり、「笑い」の要素は円滑に話を進めるために欠かせない。会話に必要な笑いを学ぶことにより、私達は自然に会話をすることが可能となる。この事実に着目した企業もある。株式会社リバネスは研究人材のコミュニケーション能力を芸人から学ぶ、『お笑いのコミュニケーション研修漫才』を実施している。また、お笑いには脳を活性化させる作用がある（畑野 2009）。人は笑いを得ると、集中力・記憶力が高まる。高校生といえば、大半の子が大学進学を希望しており、日夜受験勉強と向きあっている。お笑いの授業を高校に取り入れれば、私達は日々のストレスを解消できると共に、勉強に必要なスキルを身に付けられるのだ。以上が、私が高校の授業にお笑いを取り入れたいとする理由だ。では何故漫才でなくてはならないのか。お笑いを取り入れたいのなら、落語でも大喜利でも良いのではないだろうか。その答えは、漫才が持つ特異的な構造にある。先ほど記述した通り、漫才とは二人で言葉の応酬を行い、その掛け合いに面白味を含む形式のお笑いだ。ここで、二人ということに着目してほしい。この二人は正確に言えば「ボケ」と「ツッコミ」に分けられる。まず初めに「ボケ」が一般常識から逸脱した行為、もしくは発言をとり、それらに対し「ツッコミ」が一般的な見解から「ボケ」の誤りを指摘する。コンビによって多少の差はあれど、漫才の基本的な構造はこうだ。「ボケ」と「ツッコミ」の構造は、そのまま社会生活を営む上で必要な能力である。例えばアパレルショップの店員はクレームやマナーのなってない行動を取る人物、すなわち「ボケ」に対し適切な「ツッコミ」を与えなけ

ればならない。漫才は社会生活において重要な対応能力を高めてくれる。今までの話では、対応能力が上がるのは「ツッコミ」のみで「ボケ」の方には利がないように思われるかもしれない。しかし、少し考えていただきたい。私達は誰でも常に社会生活上での「ボケ」に成りうる。「ボケ」を演じる者はそのロールを通して、第三者目線でこの振る舞いを見つめ直せる。漫才の「ボケ」を演じることで、社会的「ボケ」を犯してしまうことを防げるのだ。さらに、「ボケ」と「ツッコミ」による効果は相互作用がある。「ツッコミ」は「ボケ」を見つめるとき、この行動を反芻し、「ボケ」もまた、「ツッコミ」されることにより、この応対を思案する。この「ボケ」と「ツッコミ」の構造こそが、私が高校の授業に「漫才」を取り入れたい理由だ。

大阪人と言えば、全員が明るく対人能力に優れていると思われているが、北大阪方面ではその理由でなく、認識の差異が生じている。お笑いは対人能力を上げてくれ、脳を活性化させて勉強にも良い。中でも漫才は「ツッコミ」と「ボケ」の構造により相互作用的に対応力と思考力を勤えてくれる。以上より、私は大阪を良くするために高等学校の授業で漫才をすべきだと考える。

参考文献
青山佳敬（2007）「大阪府における格差の実証分析」Ⅳ南北格差
畑野相子（2009）「笑いが脳の活性化に及ぼす影響」人間看護学研究 97：37－42
厚生労働省（2013）労働経済の分析 第 3 章・第 1 節「新規学卒採用において企業が求める人材」
http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/roudou/13/dl/13-1-5_01.pdf

伊丹市教育委員会からの講評

笑いが脳に及ぼす影響や企業が求めている人材など、文献を参考に書かれており、分かりやすい文章であった。笑いの中でも、なぜ漫才なのかに触れられおり、作者の漫才への思いを感じる作品であった。

最初の書き出し「大阪と言えば～などのイメージがある。」や、最終段落「大阪人と言えば、全員が明るく対人能力に優れていると思われている。」について、もう少し客観的な文献やデータに基づく説明があれば説得力が増すのではないだろうか。

【ショートショート部門講評】

ショートショート部門では、本コンテストが求めるショートショートを「短編小説よりもさらに短い小説。小説としての構成がしっかりしており、話の展開に意外性のある文章」と定義しました。この定義に基づき、「ストーリー構成」「オチの意外性」「表現力・描写力」「語彙力」の 4 つの観点から選考を行いました。特に、予想を裏切るような結末であるか、およびその結末に向かってストーリー内にうまく伏線が敷かれているかを中心に評価しました。

今年度は、応募数が増えたこともあり、テーマ設定が多様で「くすっ」と笑えるような、読んでいて楽しい作品が多くありました。しかし、ストーリー構成に優れていても結末のインパクトや伏線の敷き方に不十分な点があったり、オチがおもしろいものでも表現の仕方や言葉選びにもう一工夫欲しくなったりと、どこか精彩に欠ける印象を残しました。そのため、最優秀賞を選定せず、優秀賞と特別賞を選定するにとどまりました。

ショートショート部門・優秀賞

「教科書」　早瀬琴乃さん（関西大学第一高等学校2年）

特別賞

「私はトモキの愛〇〇」　赤尾佳昭さん（関西大学第一高等学校2年）

「転身」　盛喜勇斗さん（関西大学第一高等学校2年）

優秀賞の早瀬さんの作品「教科書」は、皮肉と風刺の効いた切れのある作品でした。また、まとまりと流れのあるストーリー構成も良質なものであると評価されました。しかしそれゆえに、無難という見方もでき、やや単調に物語が進んでしまったようにも捉えられました。起床転結の「転」を意識し、山場を作るなどの工夫をすると、より印象深いショートショートになるのではないでしょうか。

特別賞の赤尾さんの作品「私はトモキの愛〇〇」は、高校生の日常が垣間見えるストーリーでした。最後まで読むと、もう一度初めから読み返したくなるようなオチでした。ただし、オチについては賛否両論で、「予想外であった」と「予想できた」という両極端な評価に分かれました。万人の期待を裏切るオチというのは難しいと思いますが、もうひとひねりあってもよかったのかもしれません。

同じく特別賞の盛喜さんの作品「転身」は、短いながらもシンプルにまとまっていた作品でした。さらりと終わっているようで、多くは明かされない主人公の設定について、いろいろと推測してしまう不思議な魅力がありました。その一方で、オチがいささか予測可能で、あっさりしすぎて物足りないという評価にもつながってしまいました。短さの中にも深さを感じさせるような表現や伏線を考えると、作品がより面白味を増すと思います。

それでは、入賞作品と喜びの声、および伊丹市教育委員会よりいただきました各作品に対する講評をご覧ください。

【ショートショート部門優秀賞】
教科書

関西大学第一高校２年　早瀬琴乃

早瀬さんの喜びの声

この度このような賞をいただくことができ、大変嬉しく思っています。

この作品に出てくる「怒られ方教室」は実際にこの社会に存在します。私は高校一年生の時にニュースで「怒られ方教室」が特集されているのを見て、本当にこのようなものがあってもいいのかと疑問を抱いたのと同時に小さな恐怖を感じました。普段ニュースを見ている中でこれほどまでに自分の心に引っかかることはなかったので、今回の題材にすることにしました。

コンテストの条件として意外性が求められていたので、話の構成やテンポ、空白の使い方を特に意識しました。話の終盤にきて意外な展開に、ついもう一度最初から読み返してしまう。そんな作品になっていたら嬉しいです。

自分が書いた作品が沢山の人の目に触れるという貴重な機会を与えてくださり、ありがとうございました。

「数十年程前に、とある会社で新入社員に対して『怒られ方教室』というものが実施された。上司に怒られた場合どう対応すればいいのかが分からないという若者が急増したためである。上司だけでなく仲間との接し方までマニュアルがあるおかげで、大半の人が問題なく社会人としての生活を送れた。なんともおかしな話だが、結果的に『怒られ方教室』は成功を収めた。

その成果は沢山のメディアに取り上げられ瞬く間に広がり、数年の間で小学校の教科書にも影響を及ぼした。

教科書には『友達との接し方』から『家族との接し方』まで掲載されており、全国の授業で取り扱われている。これは少子化の大きな原因の一つとなっていた子供たちの自殺を食い止めようと政府が頭をひねくり回してやっとのことで絞り出した苦肉の策だった。

しかし予想外の事態が起きた。人との接し方を教科書通りに一から教え叩き込まれた子供たちのやり取りは、コミュニケーションというにはあまりにも機械的過ぎた。

『人に優しく』『思いやりを持ち』『明るく社交的で』『清く正しく』『勤勉に』『欲深くなく』『謙虚に』『協調性を持ち』『我慢強く』『身を粉にして働き』『世の中の役に立つ』素晴らしい人間に。

多くの人の多くの要望が詰め込まれた教科書は、求められていた通りの『素晴らしい人間』を作り出した。

いや、正確に言うと、口に出す言葉や行動、思考すべてがパターン化されたクローン人間を大量生産してしまったのである。

国民のなかにはこれを道徳性に欠けると非難する者もいた。恐怖を覚えたのだ。自分の子が本当に人間なのか信じられなくなった。自分の子と他人の子の違いが分からない。見た目は全くの別人なのに中身がまるで同じなのだ。異なる容器に同じ内容物を入れただけのよう。

人間が声を大にして訴え続けた『平等』がついに実現したというのに皆喜びの声をあげられずにいた。

そして頭を抱えてこう言った。

失敗した、と。

社会的には大成功だったのだ。同じ中身だから就職も会社が欲しい人数分を取るだけ。能力に多少の差はあるものの会社の業績はほぼ一定。会社同士の競争も無くなった。欲も無いから職業は何でもいい。面接もなくなった。それぞれの会社に必要な人数が割り当てられ、長年問題視されていた職業難は徐々に解消されていった。学生も社会人も自殺する者が居なくなった。犯罪もなくなった。少子化も解消された。

だがそれでは駄目だ。

なぜか。

気味が悪いからだ。

皆一様のクローン人間だからだ。

ならどうすればいい。

そうだ、『個性』を付ければいい。

『個性』があれば人間性を取り戻せる。

もはや意味など無くしてしまった多数決をすっ飛ばし、国は新しい策を出した。

『個性のある人間を作りましょう』

こうして新しい時代が幕を開けた。」

少年が原稿用紙から顔を上げると、教室から拍手が上がった。

教室には様々な色や柄の服を着た『個性的な』生徒たち。

だが皆同じ声量、同じ抑揚、同じ表情だった。

教室の隅でそれを眺めていた、年老いた教師は深いため息を落とした。

教師の手には一冊の教科書。

『個性の作り方』

教師のため息の意味を知るのは本人だけである。

伊丹市教育委員会からの講評

深く考えさせられるストーリーであった。

マニュアル（教科書）のおかげで人の画一化が進むという極端なストーリーであった。途中で解決策を打ち出したかと思えば、それも教科書に従っており、展開に意外性があった。

次期学習指導要領で求められる学力とは、知識・技能だけではなく、持っている知識等をどのように活用するかという思考力・判断力・表現力、学びに向かう力である。このような学力を養っていれば、この作品が描写するような世界にはならないだろう。まさに、学力の３要素の重要性を感じさせる作品であった。

【ショートショート部門特別賞】私はトモキの愛〇〇

関西大学第一高校２年　赤尾佳昭

私の飼い主の名は、トモキ。そうだなぁ。トモキと出会ったのは１年半前かな。トモキが、私がいた店に来て、私を指差して言ったんだ、「どうしてもこれが欲しい！」と。彼の母はため息まじりにこう言っていた、「しっかり管理できるなら。」と。その瞬間から、私の飼い主はトモキになった。いや、彼の母の言い方からすると、私の管理者かな。

トモキはいつでも私を傍においてくれていた。勉強の時も、友達と遊ぶ時も、寝る時も。しかも、裸じゃかわいそうだと言って、服を着せてくれた。そして、それを友達に自慢していた。「俺が選んだんだ。」って。友達も、「いいなー、オシャレだね。」って言ってくれた。背中は見えないのでよくわからないけど。

家の中にいる時は、トモキと私はいつも、行動を共にしている。風呂もたまに一緒に入る。夜になって私が寝ると、トモキも寝る。夜寝る時や、トモキが一人で風呂に入る時などが私の体力回復の時間。まぁ１時間もあれば完全に回復するのだが。といっても私は、休憩無しになると、起きていられるのは、マックス、2、3 時間が限界だけど。

トモキには、彼女がいる。トモキが、彼女に告白したのだが、私はそれに利用された。告白の時に私を通じて趣味が同じだとか言って。男なら告白の時ぐらい、直接言葉でするもんだ。しばらくして、彼の母が怒った口調で、「トモキ!!　あなたに任せたのが間違いだった。テスト終わるまで遊ぶの禁止。」と言って、ありとあらゆる事を制限された。漫画、ゲーム、テレビ、もちろん私も隔離された。今回の成績が良くなかったのだ。次のテストの成績が良ければ制限を解くという約束で。その時、トモキが彼の母に、「それなら……」と条件をつけていたのだが、私には聞き取れなかった。次のテストまでの間、私は彼の母に、預けられた。私はその間ほとんど寝ていた。そして次のテストの成績がかえってきた。なんとトモキは、前回よりも倍以上テストの成績が良かったのだ。彼も、彼の母も、もちろん大喜び。そして、彼の母は、「約束は守るわ。」と言って、私を彼のもとに戻してくれた。彼は喜びながら、「じゃあ行こう！」と言って、私を連れて外に出た。向かった先は私とトモキが出会った場所だった。そこでトモキは、「これにする。」と言って、私より少し大きい私に似ているのを持ってきた。店員は「わかりました。」と言って、私達をいじり始めた。何をされているか全くわからなかったが、少しして私は意識を失った。目が覚めると、私の目の前には私がいたのだ。いや、正しくは前の私の本体だ。そう、私は買い換えられたのだ。私は、トモキのアイフォン。

赤尾さんの喜びの声

喜びの声というよりかは感謝の声になりますが、作品を好評価し、賞を与えて下さった審査員の方々本当にありがとうございました。作品受賞報告の際、最初“何の話？”と驚いていました。夏に提出した作品だったので、実は提出 3 日前にこの作品の存在を思い出し、その時、原稿は真っ白でした。自分は、あまり物語を作成することが得意ではなく、800 字もどうしようと、焦っていました。どうせなら自分が好きそうな作品にしようと思い、“あ～、なる程！”と最後に全てつながる話が大好きなので、そうなるように作りました。物語を作り終え、読み返すと、少しふざけすぎたかもと思いました。なので、受賞したと話を聞いた時喜びよりもまず、ありがとうございますが最初の言葉でした。最後にもう一度、評価していただいた人々と、読んで下さった人々に感謝を告げたいと思います。

本当にありがとうございました。

伊丹市教育委員会からの講評

当初、「私」が何者か具体的には説明されていなかったが、擬人化してあることは最初の数行で伺えた。タイトルの「私はトモキの愛〇〇」は愛用の何らかの道具を指すと薄々感じていたが、読み終わったときに見返すと、なるほどと思わされた。

オチの意外性は弱いが、トモキの生活が今どきの高校生として描かれており、高校生ならば親近感を持って読むことができる作品であった。

【ショートショート部門特別賞】
転身

関西大学第一高校２年　盛喜勇斗

「生まれ変わりたいなぁ…」
とつぶやいた。
俺は、昔から暇さえあればできるはずのないことをよく妄想する癖があった。今の俺は、仕事や人間関係がうまくいかず、お金もなく彼女もいない。俺は仕事の帰り道にそんな現実から目を背けたくて、子供の頃のように妄想をしながら帰っていた。つい、
「生まれ変わりたいなぁ…」
とつぶやいてしまった。
すると、突然目の前に不思議な老人が現れた。そしてこう言った。
「誰かの人生と交換してみたくないかね。」
俺は何も考えず頷いた。すると老人は俺の両手に光をかざしながら
「明日、初めて両手で触った人間との人生を交換して差し上げましょう。」
と言い闇に消えていった。俺は騙されたと思ったがワクワクして明日の朝を待ち望んだ。
翌朝、俺は起きて誰の人生と変わろうかとおもいつついつも通りに顔を両手で洗った。その瞬間老人の言葉が頭によぎった。
「初めて両手で触った人間…」
すると、俺は両手からの光に包まれたが何事もなく洗面台に立っていた。

盛喜さんの喜びの声

僕は最初、関西大学からの電話があった時何かをやらかしてしまったのではないかなと思っていました。恐る恐る話を聞いてみると「ショートショートに入選した。」ということを言われました。初めは、あまり話が見えていなかったけれど途中からとてもすごいことだと知りました。実際のところ、入賞するとは思っていませんでした。なぜなら、学校の人達に「どう？」と見せた時に酷評をもらったからです。なので、選ばれると思ってもいませんでした。でも、自分の書いたショートショートが入選してとても嬉しかったです。こんなショートショートでも選んでくださりありがとうございます。

伊丹市教育委員会からの講評

細かい設定もなく、短い文章だったが、途中までは、これから始まるファンタジーに期待しながら読ませていただいた。
これから話が展開するかと思えば、最後の２行で、まさかの終結。思わず、クスッと笑ってしまった。
まさにこの部門で求められている「話の展開の意外性」を見事に達成している。

【編集後記】

入賞作品は以上です。ご応募くださった生徒のみなさん、ご指導くださった先生方に、心より感謝を申し上げます。

入賞作品を含めた応募作品からは、高校生のみなさんの関心が実にさまざまであることがうかがえました。そして、その関心を小論文やショートショートとして文章という形にするにあたり、「ああでもない、こうでもない」と一生懸命考えたことと推察しました。文章を書くのはもちろん、メールを書いたり対面で話したりするなど、他者に何かを伝えるときには、時間を費やして伝える内容や方法を考えることでしょう。そうして考えることが、みなさんのコミュニケーション力を育て、ひいては、人生を生き抜くための術となります。みなさんには、今後も、伝えるための試行錯誤を続けてほしいと主催者一同願っております。

最後に、入賞作品と喜びの声の掲載にあたっては、作者の意思を尊重し、こちらでの編集は最低限にとどめさせていただきました。掲載した文章は、ほぼ原文どおりであることを申し添えておきます。

平成 28 年度「考動力」作文コンテスト審査員

田中俊也　（教育開発支援センター・センター長、文学部教授）
中澤　務　（本取組責任者、文学部教授）
岩崎千晶　（教育推進部准教授）
小林至道　（教育推進部特別任命助教）
毛利美穂　（教育推進部特別任命助教）
西浦真喜子（教育推進部特別任命助教）
林田定男　（神戸市立工業高等専門学校講師、教育開発支援センター研究員）
千葉美保子（教育推進部特別任命助教）
佐々木知彦（教育開発支援センター研究員）
木元隆文　（学事局授業支援グループ）
竹中喜一　（学事局授業支援グループ）
宮田　将　（学事局授業支援グループ）

ライティングラボ TA

上田一紀　小林祐也　廣瀬有哉　吉崎雅基
内田龍之介　齋藤鮎子　福永健一　吉田直人
小田直寿　阪口紗季　森川智晶　吉田由似
狩野博美　塩見　翔　山下裕樹　米村恵吾
黒澤　暁　日並彩乃　山田和哉

本コンテストは今年度で最終回となります。ありがとうございました。

平成 28 年度「考動力」作文コンテスト・表彰式の様子

平成 29 年 3 月 17 日（金)、関西大学千里山キャンパス第 1 学舎 1 号館 5 階のライティングラボ 1 にて、「考動力」作文コンテストの表彰式を行いました。入賞者のみなさん、ご参加くださりありがとうございました。

表彰式は、関西大学教育開発支援センター・センター長の田中俊也教授による表彰状と副賞の授与（高校生の部)、本取組責任者の中澤務教授による表彰状と副賞の授与（大学生の部)、お二人の先生方からの祝辞、伊丹市教育委員会からの講評の紹介と進み、最後に全員で記念撮影をして閉会となりました。

今年度は、東京から、入賞された生徒さんだけでなく保護者の方にもご出席いただき、にぎやかな表彰式となりました。高校生への表彰をされた田中教授は、お祝いの言葉に加えて、ご自身の教え子のお話を交えて入賞作品についての講評を述べられました。入賞者の方々は、それを真摯に聞いておられました。

関西大学教育推進部・ライティングラボ
〒564-0073 大阪府吹田市山手町 3-3-35
[E-mail]　wlabo@ml.kandai.jp
[URL]　http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/